

集団からの評価が個人の選択に与える影響

2120068 嶋野 良亮 (齋藤研究室)
中等教育教員養成課程 情報専攻

1. はじめに

私たちの身の回りには選択肢があふれている。そもそも選択の定義とは「2つ以上のものの中から条件にあったもの、また、よりよいものを選び出すこと」である(松本, 2006)。選択行動については、限定されることによって選択する(布井・中嶋・吉川, 2013)、やらなければいけないことから逃げるために選択する(黒田・望月, 2012)、など様々な要因によって影響を受ける。本研究では、特に集団からの影響に焦点を当て、選択行動について検討する。

先行研究では、集団内での集団内地位や参加者との親密度によって参加者の選択に与える影響力の違いを検討している(井上・苦米地, 1970)。それに対して本研究では、集団内の一個人の特性が個人の選択に与える影響を調べるのではなく、集団そのものが与える影響について検討する。

2. 実験

実験参加者

愛知教育大学の学部生 17 名が実験に参加した。実験協力者は学部 3,4 年生であり、またその専攻教科は多様であった。5 人 1 組で行い、各グループはランダムに構成した。

実験デザイン

実験は、自分の回答に対する評価の種類 2 水準(高い評価を受けた、低い評価を受けた)と、集団代表の回答に対する評価の種類 2 水準(高い評価を提示、低い評価を提示)を要因とする、 2×2 の 2 要因参加者間計画で実施した。

実験内容

パソコン上で操作する実験システムを作成した。システムの開発言語は java で、開発環境は eclipse を使用した。集団からの個人の選択に対する評価が、個人の選択にどのような影響を与えるのかを検討するため、今回の実験では「遠隔意見交流ツール」として実験システムを作成した。実験の一連の順序は以下の通りである。

- (1) 選択肢が 2 つある質問に回答する。
- (2) 仮想的な他の参加者 9 名の回答を評価する。

- (3) 実験的に操作された参加者の回答に対する評価・集団代表の回答に対する評価を見る。
- (4) 再度同じ質問に回答する。

これを 4 つのテーマについて繰り返し、(3)における自分の回答に対する評価と集団代表の回答に対する評価のそれぞれにおける高評価、低評価の組み合わせをすべて試行した。

実験システムは単体で動作し、集団の他の成員の選択や選択理由、および集団からの評価については実験条件ごとに予め設定したものを使用した。参加者には、遠隔意見交流ツールの評価を目的とした実験であり、システムはネットワークで接続され、10 人の集団で実験を行っていることを説明した。

実験結果の分析

本研究では 1 回目と 2 回目の質問に対する選択と選択に対する確信度、集団の他の人の回答につけた得点を使用する。各データを使用し、1 回目と 2 回目での選択や確信度の変化を調べるため、従属変数として以下の分析データを算出した。

- 絶対スライダーの変化：1 回目の質問と 2 回目の質問のスライダーの値の差の絶対値。
- 正スライダーの変化：1 回目の質問と 2 回目の質問のスライダーの値の差。符号は 1 回目のスライダーが 50 以下かつ 0 に近づく変化をした場合、または 1 回目のスライダーが 50 以上かつ 100 に近づく変化をした場合正。
- 確信度の変化：1 回目の質問と 2 回目の質問の確信度の値の差。
- 絶対確信度の変化：1 回目の質問と 2 回目の質問の確信度の値の差の絶対値。

また独立変数として、参加者の回答に対する評価(高評価・低評価)と、集団代表の回答に対する評価(高評価・低評価)、参加者の集団の他の成員に対する評価(評価の平均が高い群、評価の平均が低い群)、選択に対する自信(1 回目の確信度が高い群、1 回目の確信度が低い群)を使用した。参加者の集団の他の成員に対する評価については、評価の平均値が高い 15 名を評価の平均が高い群とし、平均値が低い 15 名を評価の平均が低い群とした。また、選択に対する自信についても、1 回目の確信度

の高い群とし、確信度の低い15名を低い群とした。

仮説

本実験では以下の4つの仮説を立てた。

仮説1. 参加者が集団から低評価(高評価)を受けた時は選択を変えやすい(変えにくい)。

仮説2. 参加者の集団の他の成員に対する評価が高い(低い)ほど選択を変えやすい(変えにくい)。

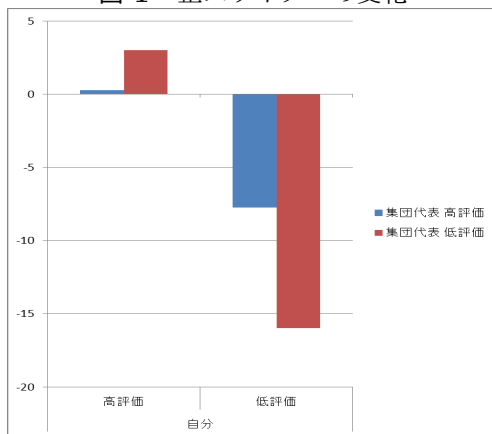
仮説3.1 回目の確信度が低い(高い)ときほど選択を変えやすい(変えにくい)。

仮説4. 高評価(低評価)を受けた集団代表の回答を表示するほうが選択を変えやすい(変えにくい)。

分析結果と考察

仮説1.と仮説4.を検討するため、各従属変数について、自分の回答に対する評価と集団代表の回答の高低を比較した。そのうち正スライダーの変化の結果を図1に示す。分析の結果、「自分の回答に対する評価」に有意な差がみられ($F(1,60)=6.74, p < .05$)、集団代表の回答に対する評価の高低に関わらず、自分の回答に低評価をつけられた場合に、選択を大きく変更していることが分かった。この結果から、参加者は自分の回答に対する集団からの評価に影響を受けることが明らかになり、仮説1.が支持された。その理由として、参加者が集団から低評価を受けた際に集団の多数が自分の意見を否定していると感じ、アッシュの先行研究より集団の多数に寄り添えるように反対選択肢に変えやすくなるのではないかと考えられる。

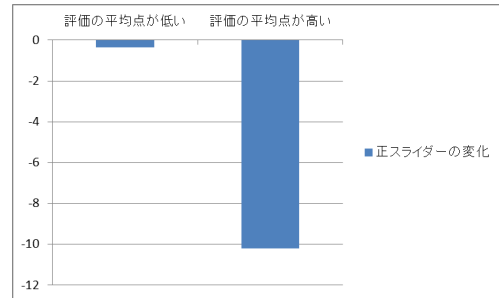
図1 正スライダーの変化



次に、仮説2.を検討するため、各従属変数について、参加者の集団の他の成員に対する評価の高低を比較した。そのうち正スライダーの変化の結果を図2に示す。分析の結果、有意な傾向がみられ($F(1,62)=3.43, p < .10$)、参加者の集団の他の成員

に対する評価が高い場合に正スライダーの変化量が大きいことが分かった。この結果から、参加者は集団の他の成員に対する評価に影響を受けることが明らかになり、仮説2.が支持された。その理由として、参加者の集団の他の成員に対する評価が高い場合を良い回答に多く出会えた場合とすると、良い回答に多く出会えた場合その回答に寄り添おうと自分の選択肢に大きな変化があるのではないかと考えられる。

図2 正スライダーの変化



最後に仮説3.について検討するため、スライダーの変化と正スライダーの変化について選択に対する自信の高低による比較を行った。分析の結果、有意な差は見られず、仮説3.は支持されなかった。

3. おわりに

本実験では個人の選択に与える集団からの評価の影響を調べた。その結果、集団から低評価を受けると個人の選択を違う方向に変え、高評価を受けると選択を変えにくくなることがわかった。また、高評価を受けることで確信度をより変化させることがわかった。

参考文献

- Asch, S. (1951). Effects of Group Pressure upon the Modification and Distortion of Judgments. *Groups, Leadership and Men*.
- 井上 健治・苫米地 憲昭 (1970). 個人の知覚的判断に及ぼす社会的勢力の影響. 『千葉大学教育学部研究紀要』, 19, 1-10.
- 黒田 卓哉・望月 聡 (2012). 行動選択における遅延傾向と意思決定の関連. 『日本教育心理学総会発表論文集』, 54, 493.
- 松本 明 (2006). 『大辞林』. 三省堂.
- 布井 雅人・中嶋 智史・吉川 左紀子 (2013). 限定ラベルが商品魅力・選択に及ぼす影響. 『認知心理学研究』, 11 (1), 43-50.